

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520238

研究課題名(和文) 富永太郎直筆原稿の画像データベース化による文学テキストの生成研究

研究課題名(英文) Generation research of the literary text by image-database-izing of a Taro Tominaga autograph manuscript

研究代表者

杉浦 静 (SUGIURA, Shizuka)

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：50140108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：大正後期に優れた詩、翻訳、絵画作品を残した富永太郎の資料(原稿、書簡、草稿、日記、手帖、絵画等)を画像データベース化し、富永太郎における文学テキストの生成の具体相を解明することを目的とした。データベースの作成にあたって、画像に対し、推敲過程を含む翻刻(テキストファイル)の付加の必要性、及び、その記述におけるTEI(Text Encoding Initiative)の有効性を明らかにした。また、全詩篇の生成過程を解明した。

研究成果の概要(英文)：The works of Taro Tominaga (including manuscripts, letters, draft works, diaries, notebooks, pictures, etc.), who left behind outstanding poems, translations, and paintings in the late Tai sho era, have been converted to an image database, with the objective of clarifying specific aspects of literary text generation pertaining to Taro Tominaga. When the database was created, the necessity for the addition of reproductions (text files) to the images including phases of refinement, as well as the effectiveness of TEI (Text Encoding Initiative) in their descriptions, were made clear. In addition, processes for the generation of all his poems were also clarified.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：草稿 富永太郎 データベース 生成研究

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本の象徴詩にきわめて重要な役割を果たしているながら、24歳という若さで夭折したため、いまだ本格的な個人全集すら編まれていない富永太郎に関して、草稿、書簡、手帖といった自筆資料を解読することによって、その文学的業績を明らかにしようとするものでそのためにまず、自筆資料研究の基礎となる、画像データベースを作成したいと考えた。

現在、富永太郎の草稿、手帖、ノート、絵画等に関しては、そのほとんどを神奈川県立近代文学館が所蔵している。これに、山口市の中原中也記念館が所蔵する一部資料と併せると、彼が生前に書き遺した自筆資料のほとんどを網羅することができる。ただし、貴重な原資料を慎重に取り扱い、当該機関に通いながら長期間にわたる研究を続けるのは極めて困難である。むしろ、複製されたデジタル資料を広く共有し、PC画面上で自由に閲覧することによって、これまでとはまったく異なるアプローチを果たして、新たな知見を獲得することができるはずである。このような考え方は、デジタル化技術やコンテンツ作成の技術的進展と相まってここ数年の間に急速に広まってきている。『中島敦文庫直筆資料画像データベース』(2009・6、神奈川県立近代文学館)、『滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集』(2011・10、八木書店)をはじめとして様々な作家詩人の草稿がデジタル化され、簡便に閲覧可能になっている。

近年のデジタルアーカイブ製作領域では急速な高度化を遂げており、資料の撮影、画像処理、スキャニング、カラーマネジメントなどに関しては多くの企業がその技術を競っている状況になっている。だが、いかに画像の精度を上げ、大容量データの高速配信を実現し、PC画面上での操作性を高めたとしても、コンテンツそのものが旧態依然のままでは、新しい研究の進展は望めないだろう。これまで紙媒体で読んでいたものが、デジタル化されたのに過ぎないのだから。

しかし、紙媒体においても、たとえば、自筆資料の提示の方法、自筆草稿の翻刻の仕方についても、各個人全集が独自の方法を競っている状況である。

富永太郎の画像データベースを、紙媒体の個人全集と考えたとき、格納すべきデータは

どのようなものであるべきか、さらにそれらは、どのように視覚化、翻刻されるべきか、を研究する必要がある。そこで、まず、現行の各種データベース、草稿資料集などについて、翻刻テキストデータの作成方法、画像データと翻刻テキストデータの組み合わせ方、画像ビューアの技術、検索システムなどを把握し、これをベースにどのような工夫ができるか研究する必要がある。

富永太郎の文学テキストの生成研究については、富永資料の存在については知られていたものの、ほとんど使用されることはなく、権田浩美の一連の研究を除いては、ほとんど手つかずの状態であった。富永太郎の近代詩史上の重要性や魅力について、あるいはフランス近代詩からの影響等についての研究は、進んでいたものの、富永詩の生成と変転の具体相を掘り下げる研究は未だ手に着いていない状況といっても良いのであった。そのため、第一歩として、画像データベースによる草稿その他自筆資料の公開が望まれている状況でもあった。

## 2. 研究の目的

(1) 富永太郎資料を用いて、文学研究における画像データベース利用の利便性を追究し、優れた研究支援ツールを開発する。

(2) 富永太郎資料を画像データベース化していく過程で得られた知見や課題を検証しつつ、その技術を広く人文科学研究の領域で活用していくためのコンテンツを構築する。

(3) 近代作家の書簡、草稿、日記、メモ等を通して創作の背景およびプロセスに迫り、そこで得た知見を再び活字資料(たとえば、個人全集の編集など)に還元する方法を示す。

(4) 画像データベースの活用による直筆資料の翻刻研究を促進し、近年、新書などの形態で刊行されている「直筆で読む」スタイルの文学テキストの普及に貢献する。

### 3. 研究の方法

(1) 富永太郎資料の画像データベース化にあたって、既成の画像データベース（日本近代の文学者のもの）について、その構築方法やインターフェイス等について比較し、直筆資料の画像データベースが人文科学の領域においてどのような価値と可能性をもっているかを研究する。サンプルとして新たに作製する富永太郎資料については、あらためて資料リストを検証し、それぞれの媒体ごとにデータベース化の方法やデータベースのシステムなどを検討する。それと同時並行的に画像データベースを活用した研究に関して、その前例を収集し、必要に応じて大型コレクションを有する大学や博物館、文学館における画像データベースの現状をリサーチする。

(2) データベース化したデジタル画像をもとに、それを手にとって読むのと同じように（あるいは、実際に手に取って読むよりもはるかに読みやすいように）するにはどうしたらいいかという観点から研究を行い、直筆資料と活字情報を効果的にクロスさせることによってどのような画面構成が実現できるか、紙媒体における編集作業及び紙面可能性の追求と同等の読みやすさをどう実現できるか、さらに紙媒体を越えた読むことの自由性をいかに実現できるかを検討する。また、それぞれの画像データに付随するキャプション、説明、注釈などの執筆を行い、〈見る〉ことと〈読む〉こと、すなわち、生々しい執筆過程を追いながら、同時に、それを解説的に説明した文字情報を読んでいくことができるようなテキストを作りあげていく。

なお、県立神奈川近代文学館に所蔵されている富永太郎資料を補い、より充実したデータベースにしていくために、富永太郎に関する他の所蔵機関を調査する。

(3) 完成した画像データベースが、研究においてどのくらい利便性があり、いままでとは違う研究を可能にするか、という観点から実践的な取り組みを行い、その内容を論文化していく。

それとともに、デジタルデータ→翻刻作業→活字テキスト（全集など）という工程で直筆資料を活字化していくためのノウハウを蓄積する。その課程で、これまでの個人全集

における草稿資料の提示の方法（翻刻、自筆草稿の活字テキスト化）について検討し、その成果をもとに、富永太郎画像データベースにおける翻刻の提示方法に戻って再検討し、より客観性、利便性を高める方向へと至る。最終的には、研究会やワークショップ、シンポジウムなどに参加して共同研究の成果を広く公開し、人文科学における汎用性の問題を考察する。

### 4. 研究成果

(1) 富永太郎草稿資料の画像データベース化にあたり、まず、草稿の現状を検討した。その結果、1枚の草稿上で、清書後推敲が行われている場合、またその推敲が時間を隔てて数次にわたって行われている場合等があることが明らかになった。また、推敲の状態も清書に匹敵するような丁寧な削除や加筆、挿入ではなく、殴り書きに近い判読しにくい字体のものや、重ね書きのようにして重なって判読困難な場合などが、多数存在することも明らかになった。

画像データベースの場合、デジタル化した草稿を示すことになるわけだが、富永草稿の中にあるような判読困難箇所について、これまでの画像データベースでは、どのような扱いがされているか検討した。検討したのは、①『山本実彦旧蔵「改造」直筆原稿』（2007・10、雄松堂書店）②『中島敦文庫直筆資料画像データベース』（2009・6、神奈川近代文学館）③『貴司山治 全日記』（2011・1、不二出版）④『小林多喜二草稿ノート・直筆原稿』（2011・2、雄松堂書店）⑤『滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集』（2011・10、八木書店）

である。その結果、これらでは、おおむね消し跡や挿入・追加、差し替えなどの推敲過程については、記述がない、あるいはあっても不十分であることが明らかになった。

ついで翻刻（草稿の文字テキスト化）にあたって、推敲過程の記述の要不要について検討した。本研究の目的の一つには、富永太郎の草稿のデータベース化を通して、草稿のデータベース化のモデルを検討するというものがあつた。そこで、富永太郎草稿以上に推敲過程の複雑なもの、抹消、追加、挿入等の甚だしい草稿を例に挙げて検討することにした。たとえば、宮沢賢治の心象スケッチ「薙露青」の草稿である。

「薙露青」草稿は、スケッチの成立後全面的に消しゴムによって抹消されている。スキャンした画像ファイルにおいては、拡大しても読めない箇所が多数ある。スキャンの精度が飛躍的に向上しているし、また、3Dスキャンといったものが登場しているののでいずれ見えるようになるかも知れないが、しかし、

現状では、消しあとの可視化には限界があることは認めざるを得ない。しかし、この詩は鉛筆で記入されたものであるため、肉眼でならかろうじて読めるのである。

宮沢賢治の使用した「兄妹像手帳」と仮称された手帖の1頁に「風の又三郎」関連のメモがある。このメモは、昭和6年頃に書かれ「風野又三郎」からそのリヴァイバルバージョンへの改作のためのものと推定されるものである。3行目に、「北海道」と書かれて消されている。また、「第二日」と「又三郎談ル」以外のすべてが、大きな○と×によって抹消されている。ここで、「北海道」は、「鉛筆」という記述の上に重なっているため、「第二日 又三郎談ル 鉛筆ヲ借シ……」の後に、「第二日 北海道」という段階があったことがわかりである。しかし、この重なりは、デジタルデータ（写真版）を見れば明白かと言え、そうとも言えないのである。実物を見て、先後関係を判断し、このデジタルデータへの注記が必要であると考えられる。

これらの例から、画像データベース作成にあたって、草稿の読み解き（翻刻）や推敲過程等の注記が必要ということが明らかになった。草稿研究では、草稿上のテキストの布置や推敲過程（削除や追加、挿入の状況）をも再現した稿を、転写稿やディプロマティックというように呼ぶが、これらのようなものが、画像データベースでは必要だということである。

次の問題は、データベースの作成者は責任を持って転写稿なりディプロマティックをつくらねばならないと思うが、ただ、その際に、テキストの布置をできる限り厳密に再現する必要があるかということである。また、テキストの重なり、削除線、挿入テキストなどは、レイヤーを用いれば、視覚的には表象可能かと思うが、しかし、それはテキストファイルで記述可能なかということである。この問題に付いては、次の様な結論を得た。画像に対する翻刻・読み解きであるから、細部については画像を参照すればよいので、布置等の厳密な再現は不要である。しかし、転写稿・ディプロマティックの作成にあたっては、汎用性、テキスト検索の発展性等々を検討すると、バイナリーファイルや、画像ファイルではなく、ユニコード対応のテキストファイルあるいはリッチテキストファイルで作成されることが必要である。その際に、加除訂正等のテキストの動態をも記述する方法としてTEI (Text Encoding Initiative) の採用が現在のところ最も望ましいと考えられる。活字ベースでは、草稿を収録する個人全集において、推敲過程を記述している。しかし、たとえば、『新校本宮沢賢治全集』と『新編 中原中也全集』、『太宰治全集』では、それぞれが独自に工夫した記述方法をとっており、削除して別の語に変更した場合の記述のしかたなどに異なっている。テキストベースのデジタルデータとして、統一した方

式での記述を目指すのがTEIである。このTEIとは、欧米で1987年より試行錯誤が続けられ現在第5版まで改訂されたデジタル媒体上でのテキスト資料の構造化に関する包括的な方針である。現在このガイドラインに従った様々なテキスト資料が公開されている。

この結論にもとづいて、研究代表者である杉浦 静が「見えないテキストを見る？—デジタル化と草稿研究」と題して、日本近代文学会6月例会（2013年6月15日、於跡見女子大学）及び、「日本近代文学研究における草稿研究とデジタル化—富永太郎草稿のデータベース化の場合」と題して、シンポジウム「東洋学におけるテキスト資料の構造化とWebの可能性」（じんもんこん2013、2013年12月9日、於京都大学）において提言を行い、大方の賛同を得た。

(2) 画像データベース作成にあたり、①全草稿の転写稿（テキストファイル）を作成し、②詩帖、手帖中に書かれている詩草稿を本文文化した。転写稿、本文文化のいずれの際にも、推敲過程を含めてテキスト化している。ただ、草稿に関してのTEIの方式について作成者において未熟な部分があるので、今回の研究では、テキストファイルでの作成にとどめた。そして③これらの稿を、各詩篇の逐次形として整理し、各詩篇ごとに生成過程を明らかにした。なお、各逐次形の推敲過程の記述方式は、草稿における本文の布置や、推敲過程の状況によって、異なる記述方法を採用した。すなわち、転写稿（ディプロマティック）方式と、第一形態と最終形態を本文文化し、途中の推敲過程は推敲箇所ごとに説明する方式が混在しているのである。本データベースの場合、各逐次形と草稿（ノート稿、手帖稿を含む）が一对一対応をしているので、読み解き部分の不統一によって、大きな問題が生じることはないはずである。

以上の成果については、

①杉浦 静「富永太郎「鳥獣剥製所」の生成」(1)「大妻国文」第43号、2012年、143-165頁

②杉浦 静「富永太郎生前発表詩篇の生成過程」「大妻女子大学紀要—文系—」第45号、2013年、57-79頁

③杉浦 静「富永太郎未発表詩篇の生成過程」(1)「大妻女子大学紀要—文系—」、第46号、2014年、59-83頁に公開した。

(3) 以上の成果に基づき、富永太郎資料の画像データベース化の骨格は完成した。今後の課題としては、データベースのインターフェイスをどのように構築するかという課題が残されている。最も利便性の高いデータベースとして、完成させるための研究を進めたい。

(4) 本データベース作成中に得られた、富永太郎の詩の生成に関する論文として、吉田

恵理「〈翻訳〉の論理と〈恥の歌〉の倫理：富永太郎「無題 京都」を中心に」（「立教大学日本文学」査読有、第108号、2012年、45-56頁）がある。これまでの富永太郎詩研究を進展させたものであり、本研究の成果の一つである。なお、研究代表者の杉浦静は、本データベースを試用して、『近代文学草稿研究事典』の項目「富永太郎」を執筆した。草稿を掲出しつつ、生成過程を論じる形式であり、「研究の目的」の（4）に対応する成果である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 杉浦 静「富永太郎「鳥獣剥製所」の生成」(1)「大妻国文」査読無、第43号、2012年、143-165頁
- ② 吉田 恵理「〈翻訳〉の論理と〈恥の歌〉の倫理：富永太郎「無題 京都」を中心に」（「立教大学日本文学」査読有、第108号、2012年、45-56頁
- ③ 杉浦 静「富永太郎生前発表詩篇の生成過程」 「大妻女子大学紀要－文系－」査読無、第45号、2013年、57-79頁
- ④ 杉浦 静「富永太郎未発表詩篇の生成過程(1)」査読無、「大妻女子大学紀要－文系－」、第46号、2014年、59-83頁

〔学会発表〕（計2件）

- ① 杉浦 静「見えないテキストを見る？－デジタル化と草稿研究」、日本近代文学学会、2013年6月15日、跡見女子大学
- ② 杉浦 静「日本近代文学研究における草稿研究とデジタル化－富永太郎草稿のデータベース化の場合」、シンポジウム「東洋学におけるテキスト資料の構造化とWebの可能性」（じんもんこん2013）、2013年12月9日、京都大学

〔図書〕（計1件）

- ① 杉浦 静、八木書店（共著）『近代文学草稿原稿研究事典』2014、印刷中  
「富永太郎」の項目執筆

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
杉浦 静 (SUGIURA Shizuka) 大妻女子大学・文学部・教授  
研究者番号：50140108
- (2) 研究分担者  
宗像 和重 (MUNAKATA Kazushige) 早稲田大学・政治経済学術院・教授  
研究者番号：90157727
- (3) 研究分担者  
石川 巧 (ISHIKAWA Takumi) 立教大学・文学部・教授  
研究者番号：60253176
- (4) 連携研究者  
桑原 規子 (KUWAHARA Noriko) 聖徳大学・文学部・准教授  
研究者番号：90364976